

「オイデイス王」と「雲」

目次

序 「オイディプス王」

- 一、 劇までのあらすじ
- 二、 オイディプス王の登場
- 三、 王妃との対話
- 四、 コリントスからの使者
- 五、 羊飼いの（元家来）の登場
- 六、 王妃と王の悲劇
- 七、 結末
- 八、 解説
- 九、 最後のクロス^{せいしやう}斉唱

「雲」について

- 一、 思案所内部の全景
- 二、 中断（中休み）
- 三、 正論と邪論
- 四、 正論（強い論）
- 五、 邪論（弱い論）
- 六、 結び

※ 参考文献

オイディプス王

序 「オイディプス王」

例えば、ソポクレスの『オイディプス王』という有名な作品は、人類史上最も評価の高い「悲劇作品」の一つであるが、それは、「……最初の言葉から、最後の言葉に至るまで、一字一句、たった一字の言葉さえ書き直したり、また、書き加えたりする必要を殆ど感じないというくらいに、まさに完成された『戯曲』（脚本）そのもの、ということ」であり、それゆえ、そのまま「舞台」の「台本」としても十二分に使える「完全なるもの」（パーフェクトなもの）であり、それに比べれば、シェイクスピアの様々な「作品」などは、あまりにも「無駄な言葉」が多過ぎると感じてしまうほどであるが、それは、一体、なぜかと問えば、それには、次のような理由があるからである。

まず最初に、古代ギリシアという時代は、もちろん、いわゆる「書き言葉」も当然ありましたが、しかし、まだ「話し言葉」中心の世界であり、それゆえ、誰もが「本」を自由に読むというような時代ではなく、日常の生活においては、多くは「話し言葉」中心で過ごしていたような時代であったということである。それは、例えば、政治家の演説にしても、また、裁判における法廷弁論にしても、或いは、ディオニソス劇場で演じられる「悲喜劇」なども、すべて「耳」から入ってくる「音」（話し言葉）として聞いていたのであり、今日のように、書物、その他などの「書き言葉」（文字）などを黙読で読むというようなことは、一部の人たちに限られていたのである。そして、当時は、一人一人が「本」（書物）を持つというような状況ではなく、むしろ「本」（書物）を手に入れた人が、「仲間」（或いはみんな）の前で読んで聞かせるというようなものであり、それゆえ、一般人たちは、いわゆる「本」（書物）というものを直接、読むというよりは、むしろ「朗読」を聞いて、つまり、「耳」から入ってくる「音」（言葉）として聞いていたということである。――例えば、プラトンの『パイドン』という著作のなかで、若いソクラテスは、「……ところで、いつか、ある人が、アナクサゴラスの書物——ということだったが、そのなかから、万物を秩序づけ万物の原因となるものは知性であるという言葉を讀んでくれるのを聞いて、ぼくはその『原因』に共鳴した。そこで、（中略）、……ぼくは、大急ぎでその書物を手にし、できるだけはやく讀んだ。……」という下りがある。つまり、当時は、有名な様々な「政治家の演説や法廷弁論或いは悲喜劇」などを声に出して「暗唱」（つまり丸暗記）をして覚えるというのが、まさに学習の「二つの方法」であったとともに、また、「本」（書物）なども、ただ黙って読むというよりは、むしろ声に出して「暗唱」するようなことが多かった時代であったということである。（それは、例えば、ホメロスの叙事詩なども、声に出して「暗唱」されたというようなことである。）

そして、文章を書くというのは、まさに「覚え書き」（つまり忘れないため）として書かれたものであったが、しかし、やがて、自分の「思いや考え」などを巧みに表現する「文章」となり、そして、それをさらにまとめ上げたものが、やがて「一冊の書物」になったということである。もちろん、知識人たちの間では、いわゆる「本」（書物）を書くということが盛んにはなるが、しかし、一般の人たちの中には、まだ文字が読めないような人たちもいて、日常の生活においては、多くは「話し言葉」中心で過ごしていたような時代であったということである。――例えば、ソクラテスは、その『弁明』のなかで、「……それはアナクサゴラスなのだ。愛するメレトス、君が訴えているつもり

の人は。そしてそれだけ、君は、ここにいる諸君をばかにしているわけなのだ。つまり、君は、この諸君が文字を解しない人たちで、クラヅメナイのアナクサゴラスの書物には、いま君の言ったような議論が、いっぱい載っているということを知らないと思っているのだ。……」と反論しているが、この『ソクラテスの裁判』には、自由市民のアテナイ人五百人が参加をして裁判を行なっていたものであり、その人たちの中には、まさに「文字を解しない人たち」もそれなりにいたのだろうという証拠となるものである。つまり、まだまだ「話し言葉」中心の時代であったということである。

そして、そのような「話し言葉」中心の時代であったということは、今日のように「本」（書物）というものが、ただ黙読で読まれることが期待されていたというよりは、むしろソポクレスの『オイディプス王』なども、まさに遙かに声に出して「暗唱」（つまり丸暗記）されることが期待されて、書かれたものであり、それゆえ、その最初の段階から、目で読む「本」（書物）などではなく、ほとんどすべて「耳」から入ってくる「音」（話し言葉）として、いかに魅力的で、いかに説得力があるかということと書かれているものである。それに比べれば、シェイクスピアの「作品」などは、遙かに目で読む「本」（書物）として書かれているものであり、それゆえ、どうしても「長過ぎるセリフや不必要な言葉」（或いは「無駄なセリフ」）などが多くなってしまうということである。

もちろん、シェイクスピアの「頭の中」（或いは「心の中」）では、当然のことながら、「舞台」の上で生身の人間たちが演じる「演劇」の「台本」として、いかに魅力的で、いかに説得力のあるセリフかを考慮に入れて、書かれているだろうが、しかし、「話し言葉」中心の時代に生まれた作品と、「話し言葉」と「書き言葉」とがすでに併用されている時代に生まれた作品との間には、まさに「決定的な違い」があるということである。——例えば、『源氏物語』を書いた紫式部は、実際に「宮廷」に仕えて、そこで藤原道長を初めとして、実に様々な貴族の人たちや女房たちの生活ぶりやその時々のお話などを何年も実際に聞きまして、そのような実には様々な「生の経験」などを踏まえて、つまり、その時代の雰囲気、その時代の言葉使い、その時代の生活ぶり、その時代の意識（心の動き方）、その他、そのようなその時代に生きている人たちでなければ絶対に分らない「微妙な違い」などを厳密に感じ分けながら、いわゆる『源氏物語』は、書かれているのであり、それに比べて、一方の、例えば、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』などは、全く時代の違う、見たことも、実際に会って話をしたこともない、遙か遠い古代ローマ時代の人たちの「心の動き」などをたとえ巧みに表現し得たとしても、それは、シェイクスピアの「頭の中」（或いは「心の中」）であれこれ想像して書かれたものであり、それゆえ、『源氏物語』などとは、まったく違うものになるということである。

一、劇までのあらすじ

それでは、次に『オイディプス王』の内容について、少し考えてみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、『デルポイの神託』によって、「……時の王ライオスは、やがて生まれる子供の手にかかって亡き者にされるべき運命にあることを、告げられる。……」。そこで、時の王ライオスは、「王妃」（イオカステ）に一子（男の子）が生まれると、すぐに「家来」の一人にその「赤子」を手渡ししては、キタイロン^{やまあい}の山間深くに捨

てて、この世から葬り去るようにと命じることになる。ところが、その「家来」は、山に捨てず、その「赤子」をその土地の「羊飼いの人」に預けてしまう。その後、その「赤子」は、コリントスの国王ポリュボスの息子として大事に育てられ、順風満帆に「青年」（若者）へと成長していく。——ところが、ある日、宴会の席上で、酒に酔った人からまれて、おまえは、ほんとうは父親の子ではないと言われる。その言葉に不安がよぎり、国王や王妃に訊ねてみても、その質問には答えてはくれない。そこで、両親には内緒で、その真相を訊ねるために、一人で、「デルポイの神託」をうかがいにおもむくことになるが、しかし、そこでの「お告げ」は、実に恐ろしい信じられないような「内容」のものであり、それは、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによって、人びとに正視するに堪えぬ子種^{こだね}をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」というものであったわけである。

そこで、オイディプスは、いわゆる「お告げ」のようなことが決して起こらないようにと、コリントスからできるだけ遠く離れたところに行こうと決心をして放浪することになる。——ところが、たまたま四人のお供を連れて、いわゆる「デルポイの神殿」へと旅に出た馬車に乗ったテバイの「国王」（つまり「実の父親」）の一行と、三叉路^{さんさろ}のところで、オイディプスは、ばったりとめぐり逢ってしまう。その結果、道の譲り合いなどで揉めて、実の父親と三人のお供を殺害してしまうが、一人だけ生き残った「お供の人」（この人は、赤子を山に捨てに行った家来でもあるが）は、テバイの都へと逃げ帰り、そして、国王ライオスとお供の三人は、盗賊たちに襲われて殺害されてしまったと、なぜか「うその報告」をすることになるのである。

さて、その後、まもなくテバイの都には、スフィンクスという怪物が出没することになる。そのスフィンクスは、肉体は、「獅子」（ライオン）の姿^{すがた}をし、背中には両翼^{つばさ}を持ち、その「顔」は、人間の女性の顔をしていた怪物であったが、そのスフィンクスは、テバイ市付近の岩の上において、その道を通る人たちに「謎」をかけていたという。しかも、その「謎かけ」が解けなかった人たちは、その場でみんな殺されていたために、テバイの人たちは、非常に恐れていたわけである。しかも、その「謎かけ」というのは、非常に有名なものであり、一般には、「……朝は四脚、昼は二脚、そして、夜は三脚で歩く動物はなにか？」という「謎かけ」になるかと思うが、しかし、その当時の内容は、「……一つの声をもち、二つの足にしてまた四つ足にしてまた三つ足なるものが地上にいる。地を這い空を飛び海を泳ぐものどものうち、これほど姿^{すがた}・背丈^{せたけ}を変えるものはない。それがもっとも多くの足に支えられて歩くときに、この肢体の力は、もっとも弱く、その速さは、もっとも遅い。……」という韻律を持った五行の歌で歌われるものであったという。

一方、そこをたまたま通りかかったオイディプスは、同じ「謎」をかけられ、それに対して、それは、「人間である」と答え、「……なぜならば、赤ん坊の時には、這い這いをして四本で歩き、その後は、立って歩くようになるので二本脚になり、そして、年老いくると、杖をついて歩くようになるので、三本脚になるからだ」とスフィンクスに答えると、その「答え」を聞いたスフィンクスは、その「謎」を解かれたことを非常に悔しがって、その場で身を投げて死んでしまった、という有名な話へと展開することになるが、このことが、つまり、テバイの人たちを苦しめていたスフィンクスという怪物を退治したということ、テバイの人たちから推挙されて、テバイの国王になるとともに、実の母親で

もある「王妃」（イオカステ）とも結婚をして、二女二男じよなんの四人の子供までもうけて、いわば幸せな十数年を過ごすことになる。しかし、そのことは、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによって、人びとに正視するに堪えぬ子種こだねをなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」という「デルポイの神託」のお告げが図らずも成就してしまったことになる。その結果として、テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれるようになるとともに、オイディプス王の宮殿の前にも、テバイの老若ろうにやくの市民たちが、嘆願たんがんのしるしとして、白い羊毛ようもうの房ふさのかざしをまいたオリブさきを捧げ、ひざまずいているという、『オイディプス王』の「悲劇」の幕が、まさにここから「舞台の上」で生身の役者たちによって演じられることになるということである。

二、オイディプス王の登場

さて、宮殿の扉が開かれ、オイディプス王は、従者を従えて堂々と登場して来る。そして、嘆き悲しむ嘆願者たちの中の、一人の年老いた神官に向かって、「……さあ、翁おきなよ、話してみるがよい。これにひかえたお前たちの、心のうちを聞かせてくれ。何の憂い、何の願いなのか。このわたしは、どんなことをしても、お前たちの助けになるつもり。もしこのような嘆願に心を動かされないとしたら、わたしは血も涙もない男というべきであろう」と語る。それに応えて、翁おきなは、スフィンクスの時のように、「……なんらかの救いの途をわたくしどものために、見出してくださいませ、国をたすけ起こしてくださいませ」と嘆願することになる。——一方、オイディプス王は、「……救われるためのただひとつの対策、それをわたしはすでに実行に移したのだ。それは、王妃の弟クレオンを、デルポイなるアポロンの社やしろにつかわして、国を救うためには何を為し何を言えばよいのか、うかがいを立ててくるように命じてある」と語る。やがて、その「使い」（クレオン）が戻って来て、次のように告げるのであった。それは、「……この地くにには、ひとつの汚れけがが巣くっている。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもって血をつぐなうこと。——国をゆるがしている嵐もとのの因は、その流された血にありと知れ。……」というものであり、それは、つまり、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人げしゅにんを見つけ出して、それを罰せよ、という内容になるということである。

そこで、オイディプス王は、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人げしゅにんを見つけ出す「方法」として、まず、次のような「布告」を出すのである。それは、「……もしお前たちのうちに、ラブダゴスの子ライオスが誰の手にかかつて、最期をとげたかを知る者があれば、わたしはその者に命じる、その旨むねを包まずこのわたしに申し出よ。次に、もし当の罪びとがいて恐れているのであれば、すべからく自首して出て、その咎とがをわが身より除き去るがよい。そうすれば、過酷な罰は何ひとつ受けることなく、身柄は無事のまま、国外へ立ち去るだけですむだろう。さらにまた、もし殺害者が他国の人間であって、その下手人げしゅにんを知っている者があれば、その場合も決して口をつぐんでいることはならぬ。知らせた者には褒美ほうびをとらせた上に、わたしは感謝の気持を惜しまぬだろう。

さりながら、もしお前たちが口をつぐんでいるつもりならば、そして恐れのためにこの申しつけにそむいて、友ないし自分の身をかばおうとする者があるならば、それに対して

わたしのとる処置を、いまこのわたしの口からよく聞いておくがよい。——よいか、いやしくもわたしが王位にあつて支配しているかぎり、この地にすむ者は誰ひとりとして、罪をかくすその男を、それがよし何者であれ、家に迎えることも、話しかけることも、けつしてあいならぬ。その罪びとと共に神々に祈ることも、犠牲をささげることも、また清めの式にあずからしめることも、いっさいあいならぬ。国民こそつてこの男を、家々よりしりぞけ（追放せよ）。ピュティアの神託がいましたが、わたしに示したもうたところによれば、われらの国の汚れは、ほかならぬこの男にあるのだから」と告げるのであつた。

ところで、この「布告」の中で、例えば、「……もし当の罪びと（先王の殺害者）がいて恐れているのであれば、すべからず自首して出て、その咎をわが身より除き去るがよい。そうすれば、過酷な罰は何ひとつ受けることなく、身柄は無事のまま、国外へ立ち去るだけですむだろう」とある。それでは、なぜ、オイディプス王は、このような「軽い刑」でよいと考えるのだろうか？ それは、「罪びと」が自首しやすくするためと、もう一つは、今、何よりも大事なことは、先王の殺害者を「重く罰する」ようなことではなく、今、最も大事なことは、「……テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれているような情況（状態）から、一刻も早く、救い出すことであり」、そのためには、「……この地には、ひとつの汚れが巣くっている。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもつて血をつぐなうこと。——国をゆるがしている嵐の因は、その流された血にありと知れ。……」とあるように、まさに「罪びと（先王の殺害者）を（国外に）追放する」ことによつて、その「汚れを清める」ことができて、テバイの都は、まさに救われることになるからである。——一方、「罪びと」（先王の殺害者）がテバイの都に潜んでいる限りは、「……テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれている情況（状態）は、なおも続き、その「禍」から解放されることがないということである。

*

*

さて、オイディプス王の、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人を見つけ出す「方法」としての、もう一つの「方法」は、王妃の弟クレオンの「進言」を受けて、「ポイボス」（アポロン）とほぼかわりなき、もの見る力の持ち主として名高い、一人の年老いた盲目の「予言者」（テイレシアス）を連れて来るようにと、オイディプス王は、すでに「命令」を出しており、やがて、その年老いた盲目の「予言者」は、少年の手にひかれて、やつて来ることになる。そこで、オイディプス王は、さつそく、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人は、いったい誰なのか？ その年老いた盲目の「予言者」に何度も問いかけ、とことん問い詰めることになるが、その年老いた盲目の「予言者」は、何としてもそれに答えようとしなない。しかし、オイディプス王の余りにもひどい言葉に終には憤慨して、最後には、「……前国王（ライオス）を殺害した下手人は、オイディプス王、あなた自身だ」と答えてしまう。これに激怒したオイディプス王は、これは、何らかの「陰謀」（悪企み）に違いないと思い込んで、王妃の弟クレオンとこの年老いた盲目の「予言者」とが結託をして、自分の王位を狙う陰謀者だとして逆に疑つてしまう展開になるが、一方、王妃の弟クレオンは、自分が疑われたことに激しく憤慨はするが、オイディプス王と「会話」を重ねていく中で、「……自分は、王妃の弟であり、それゆえ、今でも王位と同じくらい

自分の思い通りの生活ができているのに、何で好んで王位などを狙う必要があるのか？」
と言ひ、また、そこにやって来た「王妃」（イオカステ）にも説得されて、オイディプス
王は、その「怒りや疑い」などをしぶしぶ収めることになるのである。

三、王妃との会話

そして、今度は、「王妃」（イオカステ）との「会話」になっていくわけだが、その会
話の中で、それにしても、なぜそこまで激怒なさるのかと聞かれて、オイディプス王は、
それに答えて、彼と盲目の「予言者」とが結託をして、「……自分を前国王（ライオス）
を殺害した下手人だと言うのだ」というと、「王妃」（イオカステ）は、「……それならば、
安心して下さい。前国王（ライオス）は、旅の途中、三叉路のところで、盗賊たちに襲わ
れて殺害されたのです」と言ふと、それを聞いたオイディプス王は、その「三叉路」とい
う言葉に極めて敏感に反応して、「……妃よ、何とわが心はゆらぎ、わが胸は騒ぐことであ
ろう」と言つて、「王妃」（イオカステ）から、その時の様子をできるだけ詳しく聞く
ことになるが、詳しく聞けば聞くほど符合するところが多くなり、不安は、ますます深ま
っていくが、一つだけ符合しないところは、「……前国王（ライオス）は、一人ではなく、
盗賊たちによつて殺害された」というところであり、そこで、オイディプス王は、一人な
のか、それとも複数なのか、そこがどうしても正確に知りたくて、事件の知らせをもたら
した家来、それは、一人だけ生き残った「お供の人」（この人は、赤子を山に捨てに行つ
た家来でもあるが）を、すぐに連れて参れと命令することになるのである。

四、コリントスからの使者

さて、「王妃」（イオカステ）は、手に祈願の小枝と香を持ち、侍女たちを従えて館の
内から登場し、アポロンの祭壇の前に立ち、オイディプス王の「尋常ならず心痛」を心配
して、アポロンの神に、「……なにとぞわたくしどものために、この穢れをきよめ、救わ
れる途をお示しくくださいますように。このままでは、（中略）、ただおびえおののくばか
りでございます」という祈りを捧げ終わる頃に、コリントスからの「使者」がやってくる。
そして、その「使者」は、コリントスの「王」（ポリュボス）が病気でなくなり、かわつ
て、オイディプスにそのコリントスの「国王」になってほしいという「知らせ」をもたら
すことになる。その「知らせ」を聞いて、オイディプス王は、ひとまず、これで「父親の
殺害者」にならずに済んだと喜ぶが、しかし、まだ「母親」が残っているので、安心はで
きぬと言ふと、そのコリントスからの「使者」は、「……その懸念は何の言われも無きも
のと、ご承知あれ」と言ふ。なぜかと問ふと、「……ポリュボス様はあなたにとつて、何
の血のつながりもないおかたでした」と告げる。そして、そのコリントスの「使者」は、
ことの次第をさらに説明することになるが、それは、山で羊飼いをしていた時、山に「赤
子」を捨てに来た「家来」から、その「赤子」をあずかり、そして、お子さまのいなかっ
たコリントスの「国王」（ポリュボス）に、わたしがさし上げたのです。しかも、その「赤
子」の「両足を刺し貫いた留金も、わたしが抜いてさし上げたのです」と説明をする。す
ると、オイディプス王は、それでは、その山に「赤子」を捨てに行った「家来」に会いた

いと言うと、それは、前に「早く連れて参れ」と言った、事件の知らせをもたらした家来、その一人だけ生き残った「お供の人」こそは、まさに「赤子を山に捨てに行った家来」でもあると知らされるのである。

五、羊飼（元家来）の登場

そして、「物語」（ストーリー）は、まさにクライマックスへと向かうことになるが、それは、当の「羊飼（元家来）」（それは、すっかり年老いた「元家来」）がやってくるからである。そして、その「羊飼（元家来）」と「使者」それに「オイディプス王」との、この三人の「会話」になっていく。そして、当の「羊飼（元家来）」は、できるだけ核心部分は何も語りたくないと思っているが、それは、なぜかと問えば、それは、まさに「すべてを知っている」からである。——つまり、時の国王ライオス（正確には「王妃」）から、三日も立たぬ「赤子」を山に捨てるようにと命じられたこと。だが、その「赤子」は、山には捨てず、その土地の「羊飼（元家来）」（つまり「使者」）に与えたこと。また、三叉路で、国王ライオスとお供の三人が、オイディプスに殺害され、自分だけ一人生き残り、テバイへと逃げ帰り、そして、「うその報告」（つまり「盗賊たち、に殺害されたという報告」）をしたこと。そして、そのオイディプスが国王になった時に、王妃にどうか自分をいなかへとやって、羊飼にしてほしいと切に願ひ出、結局、羊飼になったこと。つまり、彼は、すべてのことを知っている、まさに「生き証人」その人そのものである。

一方、オイディプス王は、何が何でも「真相」（ほんとうのこと）が知りたいと強く決心していて、それに不安を感じた「王妃」（イオカステ）は、おん身のため、もうこれ以上深く詮索なさることは、後生だからおやめになってくださいと心の底から懇願するが、聞き入れられず、やがて、王妃は狂わんばかりの御苦悶にかり立てられて、館の内へと走り込んでしまう。一方、オイディプス王は、「羊飼（元家来）」に、「……お前はこの者（使者）に赤子を与えたのか、与えなかったのか？」と問い、「……言わぬと、命はないぞ」と脅されるので、結局は、「与えた」と答えてしまう。それでは、誰が「赤子」をお前にあずけたのかと聞くと、それは、「王妃さま」でございませと答え、「何のために？」と聞くと、それは、「……殺すようにとの、御言いつけ」でしたと答える。「……非情にも、みずからの子を？」と問うと、それは、「……この子がやがて、親を殺すであろうとの、お告げのため」なのですと答える。それでは、「……お前は、なぜこの老人（使者）に渡したのだ」と聞くと、それは、「……不憫で殺すに忍びなかったからでございませ。王よ、きつとこの男が自分の故郷の、遠い他国へ連れ去るだろう」と思つて、そうしたのですと答えると、オイディプス王は、「……すべては紛うかたなく、果たされた」と言つて、宮殿の内へと走り込んでしまう……。

六、王妃と王の悲劇

さて、狂わんばかりの御苦悶にかり立てられて、宮殿の内へと走り込んだ「王妃」（イオカステ）は、結局は、夫婦の臥床で首を吊つて自害をしてしまう。そして、その時の様子はと言えば、「……亡くなられた前の夫ライオスの名前を呼び、呼びつつ想うことは、

二人の間に生まれた子供のことであり、その子の手にかかって父親みずからは命を失い、残された母親は、自分の生みの子との間に子種^{こたね}をなすことになってしまったという、おぞましい『運命』のこと、そして、夫によつて夫を生み、子によつて子を生み、かくて二重の母となったその『夫婦の臥床^ね』を嘆いた。……』ということである。一方、オイディプス王は、あちこちを走り回って「王妃」（イオカステ）を探しまわり、やがて、門^{かど}のかかった「両開きの扉」をこじ開けると、そこで目にしたものは、宙に吊^つられたまま、なお揺れているお妃さまの姿であつた。それを見るなり、獣^{けもの}のような恐ろしい叫び声をあげて、妃の首にかかつていたひもをほどき、そして、妃の亡骸^{なきがら}を床に横たえてから、オイディプス王は、こう叫びながら。「……もはやお前たちは、この身にふりかかつてきた数々の禍も、おれがみずから犯してきたもろもの罪業も、見てくれるな！ いまよりのち、お前たちは、暗闇の中にあれ！ 目にしてはならぬ人を見、知りたいとねがっていた人を見わたせることのできなかつたお前たちは、もう誰の姿も見てはならぬ……」と叫びながら、妃の上着^{かみぎ}を飾っていた、黄金づくりの留金を引き抜くなり、高くそれをふりかざして、ご自分の両の眼ふかく、真向から突き刺し、しかも、「……いくたびもいくたびもあのかたは、手をふりかざしては両の眼を突き刺しつづけたのです。……」ということになる。（ちなみに、「お前たち」とは、すなわち、オイディプス王の「両眼」のことである。）

七、結末

その後、オイディプス王は、長く嘆き叫びながらも、次の国王になるであろう、王妃の「実の弟」（クレオン）に、王妃の亡骸^{なきがら}の埋葬は、「……よきように取りはからつてもらいたい」と頼み、また、自分の身柄については、自分が生きている限り、決してこの祖国テバイの住民たらしめることなく、ねがわくば、わが父母が生前、わしの墓場と決めたキタイロンの、あの山間^{さんかん}ふかく住まうことをゆるしてくれたまえ。そこで死んでいきたいのだと。ただ、心から心配なのは、残された四人の子供のことであり、男の二人は、男の子だから、心配はないだろうが、可哀そうな二人の娘、どうかあの娘たちのことは、くれぐれも気づかつてやつてくれと。そして、ゆるされるならば、最後の頼みを聞いてもらいたい。それは、「……いまあの子たちに手を触れて、心ゆくまで不幸を嘆きたいのだ。……」と。そこで、すすり泣く娘たちと最後の別れの時を過ぎしては、オイディプス王は、「……それではさあ、わしをここから連れ去ってくれ」と言つて、クレオンに導かれて宮殿のほうへ歩み去る。クロス斉唱^{せいしやう}をもつてこれを見送る、というところで幕が下りることになるわけである。

八、解説

さて、非常に長い「内容」説明になつてしまつたが、それは、なぜかと言えば、それは、多くの人たちは、もちろん、有名な『オイディプス王』の話は、よくご存知だろうと思うが、しかし、こと細かな「内容」までは、恐らく、よくは知らないだろうと思つて、敢えて「こと細かな内容」をできるだけ「原文」（翻訳文）の文章を生かして、説明してみたかったということである。それでは、『オイディプス王』という作品の、いったいどこが

どのように優れているのかという問題について、少し考えてみたいと思う。

*

*

まず、オイディプス王は、何も知らなかった。或いは、何も知らされてはいなかった。だからこそ、そこから、まさに「ドラマ」が始まるのである。そして、唯一知らされていたことは、あの「デルポイの神託」における、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによって、人びとに正視するに堪えぬ子種^{こだね}をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」という「お告げ」の言葉だけであった。しかも、その「お告げ」の言葉は、人間のいかなる努力を持っても、何としても逃れることのできない、まさに「運命」（或いは「宿命」）そのものになっているということである。それは、——例えば、孫悟空が力の限りを尽くして世界の果てまで行っても、結局は、お釈迦様の「手の中」（つまりは「運命」そのもの）からは、如何とも逃れがたいのと、まったく同じことである。つまり、登場人物全員は、オイディプス王の不利になるような発言は、なるべく避けようとしているにもかかわらず、オイディプス王自身が「事実や真実」を無理やりに言わせてしまう、まさに「悲劇」そのもの、（つまり「良かれと思ってやっていることが、結果としては、すべて不幸な方向へと向かってしまうということ」）である。

例えば、「人間界」と「天上界」（つまり「神々の世界」とがあるとするれば、「天上界」（つまり「神々の世界」）では、人間が行なっているすべての「行為」（言動）などは、すべてお見通しということになってしまう。それゆえ、「人間界」でたとえ他人をいかにうまくごまかし通せたとしても、いわゆる「天上界」の神々をだますことはできない。例えば、「神々」（或いは「自然の摂理」）によって、その人の一生の「運命」が定められてしまうと、その人は、いくらその「運命」から逃れようと努力をしても、その人は、その定められた「運命」からは、何としても逃れられないことになる。——例えば、われわれ人間にとつて、どのような両親から生まれるかは、まさに「運命」（或いは「宿命」）そのものであり、また、その人の「姿・形^{すがたかたち}」がどのようなものになるのかも、すべて両親のまさに「遺伝子」（DNA）の組み合わせによって決定づけられてしまう。それゆえ、その「運命」（或いは「宿命」）からは、誰も逃れることはできないのである。また、ある病気になる「遺伝子」（DNA）を持つて生まれた人は、本人がいくらその「病氣」から逃れようと努力をしても、結局は、その人は、その「病氣」になってしまう。そして、その人の「運命」（或いは「宿命」）と呼ぶならば、呼ぶことも出来得るだろう。そして、その人のその「運命」（或いは「宿命」）からは、本人がいくら努力をしても、何としても逃れがたいということである。

それでは、主人公であるオイディプスという人は、なぜ、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによって、人びとに正視するに堪えぬ子種^{こだね}をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」というような、まさに「運命」（或いは「宿命」）を背負って、この世に生まれて来たのだろうか？——まず、考えられることは、両親の何らかの「罪」（罪業）が、子にむくいるということである。そのために、父親は、わが子に殺され、母親は、わが子と交わり、やがては自ら命を絶つような結果になってしまう。次に考えられることは、オイディプス王自身が、いわば「前世」において、何らかの「重い罪」を犯したために、このような「運命」（或いは「宿命」）を背負わされて、この世に生まれてきたということである。もちろん、今日のわれわれには、

そのような「考え方」はでき難いが、しかし、当時の人たちにとっては、それは、あまりにも自然な「考え方」の一つであつたことに間違ひはないだろう。

さて、オイディプス王は、なぜ、ちまたに、このような嘆き悲しむような事態が生じているのか？ その「原因」とその「解決方法」とを何としてでも探り出さなければならぬと考える。――そこで、具体的には、まず最初に、「アポロンの社」におうかがいを立てて、それによって、「……この地には、ひとつの汚れが巣くっている。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもつて血をつぐなうこと」と告げられる。つまり、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人を見つけ出して、それを罰せよ、ということだと知る。次に、一人の年老いた盲目の「予言者」を呼び、訊ねることによって、「……前国王（ライオス）を殺害した下手人は、実は、オイディプス王、あなた自身だ」と聞かされる。また、「王妃」（イオカステ）からは、国王が殺害された、いわゆる「三叉路での事件」についての詳しい内容が知らされる。そして、「使者」からは、あなたは、実は、コリントスの「国王」（ポリュボス）の实の子供ではなく、実は、この私が子供のいなかった国王に「赤子」（あなた）を与えたのです、ということが判明する。さらに、「羊飼ひ」（元家来）からは、誰が何のために「赤子」を山に捨てるように命じたのか？ それは、王妃からであり、その理由は、「……この子がやがて、親を殺すであろうとの、お告げのため」であつたと言ひ、また、なぜ「赤子」は山に捨てられず、その土地の「羊飼ひ」（つまり「使者」）にあずけられたのか？ それは、あまりに「……不憫で殺すには忍びなかつたから」と、それらすべてのことが明らかになつていくという展開になつてゐるのである。

つまり、『オイディプス王』という作品は、まさに「謎解き」が生命の作品であり、オイディプス王自らが、積極的に、次から次と様々な「事実や真実」などを明らかにしていく過程が、同時に、そのままオイディプス王の「生い立ち」（その「全人生」）の「謎解き」になつていくという、つまり、オイディプス王に関わる様々な「謎」が少しずつ解かれていくという展開になつてゐる。しかも、その「謎」が解かれていくたびに、オイディプス王は、まさに「驚愕と戦慄」とを覚えることになる。なぜなら、ふつうであれば、吉報となるものも、逆に、悪報になつてしまふ。良かれと思つてやつてゐることが、逆に、悪い方向へと向かつてしまふ。やることなすことが、すべて「悲劇」へと向かつて行く。それは、なぜかと問えば、それが、まさにその人の生まれながらに背負つてゐる「運命」（或いは「宿命」）だからということになる。――つまり、「人間界」の努力だけでは、「天上界」（或いは「自然界」）の摂理は、如何ともし難い。例えば、「天上界」が、仮に全知全能的な世界であるとすれば、この「地上界」（「人間界」）というのは、知る能力にも、また、行なう能力にも、自ずと「限界」があり、「天上界」（或いは「自然界」）の摂理からは、何としても逃れがたいということである。つまり、「天」（或いは「自然界」）に逆らうことは、如何ともでき難い。だからこそ、われわれ人間は、まさに「畏敬の念」を持つて、「天」（或いは「自然界」）と向き合ふなければならないし、また、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、ずっとそのような「向き合い方」を続けて来たということである。

つまり、「天」（或いは「自然界」）というのは、本来、どこまでも「不気味で恐ろしいもの」であり、例えば、海であれ、山であれ、川であれ、空であれ、その他、何であれ、ひとたび本気で荒れ狂つたら、人間などひとたまりもないものである。だからこそ、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、様々な「自然」を「神」として崇め、祭り、生け贄や供

え物などをし、歌ったり、踊ったりして、その「ご機嫌」を伺いながら、まさに「自然の驚異」を「鎮めてきた」ということである。そういう意味では、例えば、「デルポイの神託」なども、いわば「無力な人間」が、まさに「天」の声を聴くという一つの「象徴的な行為」になっているのだろう……。

九、汝自身を知れ

例えば、デルポイの「アポロン神殿」には、有名な「汝自身を知れ」という銘文が記されている。もちろん、それについては、いろいろな解釈がなされているだろうが、基本的には、一つは、文字通り、「自分自身を知る」ということ。一つは、「自分の分をわきまえる」ということ。そして、もう一つは、「人間としての分をわきまえる」という意味になるかと思う。——例えば、オイディプス王は、いわゆる自分自身の「出生の秘密」については、何も知らなかった。或いは、何も知らされてはいなかった。だからこそ、まさに「悲劇」は生じるのであり、若しも何もかも知っていたならば、そもそも「悲劇」の起こりようがないものである。それは、実の父親を殺したり、また、母親と結婚したりするようなことは、ふつうでは起こりにくいものである。例えば、『ロミオとジュリエット』にしても、相手が死んだと思ったから、自分も自害するのであり、相手がやがて生き返ると知っていたならば、何も自害などする必要もなければ、また、お互いが自害し合うという「悲劇」なども起こりようがないのである。例えば、われわれの「人間関係」にしても、お互いの「心」が何から何まで分かっていたら、そもそも「誤解し合う」というようなこともなければ、また、その様々な「誤解」から、何らかの揉め事や争い或いは「悲劇」などが生じるということも、基本的にはあり得ないということである。そういう意味では、様々な「無知や誤解」こそは、まさに何らかの揉め事や争い或いは「悲劇」などが生じる、まさに「源泉」になるということである。

十、悲劇と喜劇

それでは、「悲劇」とは、一体、何かという問いに対して、アリストテレスは、次のようなことを言っている。つまり、「……最もすぐれた悲劇の物語構成は、『単純』なそれではなく『複合的』でなければならず、それも『恐ろしく』また『いたましい』出来事を描写するものでなければならぬ。また、その人物の設定としては、徳と正義において特別にすぐれているわけでもなく、しかしまた自分の悪徳や邪悪さなどで不幸になるのでもなくて、ある『過ち』のために不幸におちいるような人であり、大いなる名声と幸運のうちにある人物たちのひとりでなければならぬ。……しかも、むごたらしい出来事が『近親関係』のうちに起こるような場合、例えば、兄弟が兄弟を、息子が父親を、母親が息子を、息子が母親を、殺害したり、殺害しようともくろんだり、或いは、他のなにかそのようなことを行なったりする方が、ふつうの場合よりも効果的であり、また、知らずに行なつて、あとで『近親関係』が知れるというのも、より効果的である」と言っている。これらは、まさに「その通り」であり、実に見事な「考察」になっているかと思う。

ただ、ここでアリストテレスの『詩学』をあれこれ取り上げるつもりはないので、あと

は、各人の読書にまかせたいと思うが、ただ、ここでの「悲劇」の定義としては、基本的には、「……良かれと思つてやっていることが、結果として、悪い方向（例えば不幸）へと向かつてしまう」ということになるかと思う。——一方、例えば、悪いことだと知つていながら、何か悪いことをして、たとえ不幸になったとしても、それは、「悲劇」ではなく、それは、むしろ「自業自得」になってしまう。——例えば、溺れている子供を助けようとして死んでしまうのが、まさに「悲劇」であり、逆に、遊泳禁止のところで泳いで死んでしまうのは、むしろ「自業自得」になってしまう。また、酔っぱらい運転やスピード違反などで事故を起こした場合も、やはり「自業自得」になってしまう。基本的には、「……良かれと思つてやっていることが、結果として、悪い方向（例えば不幸）へと向かつてしまう」ようなものでなければならぬのである。

また、「悲劇」と「喜劇」との違いは、一体、何かと問えば、それに対して、アリストテレスは、次のように語っている。——つまり、「……悲劇とは、われわれ自身よりすぐれた人物たちを描写するものであり、一方、喜劇というのは、比較的劣悪な性格の人物の描写である」と述べている。もちろん、これだけでは、余りにも大ざっぱ過ぎるかと思うが、しかし、その「本質」(的)は、的確に捉えている(つまり「ど真ん中を射抜いていゝ」)のである。——例えば、「喜劇」の場合、その「比較的劣悪な性格」こそは、まさに様々な「出来事」(お笑い)を生み出す、まさに「源泉」そのものであり、しかも「比較的」というのは、観ている人たちに「不快感や嫌悪感或いは憎悪感」などを与えない程度の、まさに「にくめないような人物」ということである。——例えば、寅さんシリーズや釣りばかシリーズ或いは無責任シリーズやばか殿シリーズ、その他などは、みな「同じような性格」であり、それは、決して「すぐれた人物」ではなく、むしろ「欠陥のある人物」であり、その人物の実に様々な「無知や思い違い或いは浅知恵その他」などから、実に様々な「出来事」(お笑い)が生み出されるとともに、本来ならば、周りの人の中ではかなり変わった存在でありながら、その「にくめないような人物」設定であるがゆえに、その「言動」も常識はずれなことが多くても悪意がないという、そういう印象を与えることによつて、かえつて、様々な「不快感や嫌悪感或いは憎悪感」などを取り除いているということである。一方、その内容が的を射ているような時には、観ている人たちの「共感や涙など」を呼び覚ましては、いわゆる「笑わせながら、しかも泣かせる」という、まさに「喜劇」の「神髄」そのものとなり、それは、「悲劇」だけではなく、「喜劇」でも、それが真に優れた「喜劇」であれば、いわゆる「カタルシス」(つまり「心の浄化」)を生じさせることもでき得るといふ、その代表としては、例えば、チャップリンの一連の「作品」などを挙げてもよいのではないかと思う。

十一、最後のクロス斉唱

さて、ソポクレスの『オイディプス王』からは、話が大きくそれてしまったが、その『オイディプス王』の最後は、次のような「言葉」(クロス斉唱)で終わっている。つまり、「……おお、祖国デバイに住む人々よ、心して見よ、これぞオイディプス、かつては名だかき謎の解き手、権勢ならぶ者もなく、町びとこぞりてその幸運を、羨み仰ぎて見しも

のを、ああ、何たる非運の荒浪に 吞まれてほろびたまいしぞ。されば死すべき人の身は、はるかにかの最期の日の見きわめを待て。何らの苦しみにもあわずして この世のきわに至るまでは、何びとをも幸福とは呼ぶなかれ」と。これは、実に見事な「締め括り」であり、例えば、「かつては名だかき謎の解き手」とあるが、それはもちろん、スフィックスの解き難き「謎かけ」を解いたということであり、その結果、「……権勢ならぶ者もなく、町びとこぞりてその幸運を、羨み仰ぎ見るような存在」にもなったが、しかし、その「名だかき謎の解き手」であるがゆえに、かえって、オイディプス王は、自らの努力で自身身の「生い立ち」（その「全人生」）の「謎解き」まですべてやり尽くしてしまい、その結果として、終には自分に背負わされたまさに「運命」（或いは「宿命」）そのものまで解明尽くし、その余りにも呪われた「運命」（或いは「宿命」）に堪えきれずに、終には自らの手で両眼を突き刺すという、まさに「悲劇」の主人公そのものになってしまう。それが、まさに「……何たる非運の荒浪に 吞まれてほろびたまいしぞ」であり、それは、他人によつて滅ばされたのではなく、むしろ自らの「意志」によつて、まさに「良かれと思つてやつていたことが、結果として、すべて悪い方向（つまり不幸）へと向かつてしまった」ということである。そして、「……されば死すべき人の身は、はるかにかの最期の日の見きわめを待て」とあるが、それは、「……棺桶に収まるまでは、その人の人生がどうなるかなどはまったく分からない」ということであり、たとえ今は幸せだとしても、それは、明日の幸せを何ら保証してくれるものではなく、また、たとえ今は恵まれていなくても、その人の努力と幸運次第で、まさに明日という「道」が開けることは、いくらでもあり得ることである。そして、最後は、「……何らの苦しみにもあわずして、この世のきわに至るまでは、何びとをも幸福とは呼ぶなかれ」と合唱している。——つまり、人生というのは、まさに最後の最後までどうなるかはまったく分からないものであり、それゆえ、人生の「途中」（途上）で、例えば、自分は幸せだとか、あるいは自分は不幸だとか、また、あの人は幸せだとか、あるいは不幸だとか、その他、どのようなことであれ、それは、最期の日になって、初めて分かるものであり、それまでは、決して「幸せとも不幸とも呼ぶことなかれ」ということである。

*

*

「双海」

「雲」について

例えば、古代ギリシア最大の喜劇作家であったアリストパネスの数多くの「作品」のなかには、有名なソクラテスが登場して来る『雲』という作品もあり、それは、特に作者（或いは当時の人たち）がソクラテスという人物をどのように見ていたのか、また、当時の古代ギリシア人の「新旧のものの考え方の違い」などを知る上でも、非常に貴重な作品の一つであるとともに、この劇が上演されたのは、ソクラテスが四十六歳の時であった。

そこで、その作品の「内容」（ストーリー）を順を追って考えてみたいと思うが、まず、「父親」（ストレプシアデス）は、「息子」（ペイディピデス）の「馬狂い」（馬を買うこと）によって、多額の借金を抱え込んでいるとともに、その支払い期限が迫っていて、夜も眠れないという「心的状態」であり、何か「打開策」はないかとあれこれ思案しているうちに、ふとあることを思いつくことになる。それは、息子を「ソクラテスの学校」（思案所）に入れるということであり、その「思案所」（思案所）では、「……正邪にかかわらず、議論に勝てる方法を、金さえ出せば、教えてくれる」という所であった。ところが、息子（ペイディピデス）は、「……あのほら吹き、青白い顔をして、履物（はきもの）もはかないでいる連中のことでしょう。悪いダイモンに憑（つ）かれてるソクラテスだの、カイレポンだのの一味、そういう人たちの仲間へ入るなんて、そんなことは、とても出来はしません」と断ってしまう。それに対して、「父親」（ストレプシアデス）は、「……あの人たちのところにはなあ、二種類の論があるという話だ。内容はともかくとして、強い論と弱い論だ。そしてこの両論のうち、弱い論の法が、不正を主張する立場なのだけれども、議論の上では勝つという話だ。だから、お前がこの不正の論を習って来てくれれば、今わしがお前のお蔭で背負わされている借金は、返さないでいいことになるだろう。一文も、だれにもだ」と言う、「息子」（ペイディピデス）は、絶対にいやです、と強く拒否してしまう。

そこで、「父親」（ストレプシアデス）は、「……まあいい、わし自身が思案所へ出掛けて行って、教育を受けるとしよう。そうすると、どうだろうな、のろまのこのおれが、年を取って、もの忘れもひどいというのに、精密議論の細かい点が覚えられるだろうか。まあ、行ってみるほかはない」ということで、その「思案所」（思案所）の戸を思い切って叩くことになる。家の中から弟子が出てきて、「……本当に無学な奴はこれだから困る。お蔭でせっかく発見した思案を流産させられてしまったではないか」と言う、「……これはごめんなさいよ。何しろ遠い田舎から出てきたもんだからね。それはそうと、いまのその流産させられたものを、ひとつ聞かせておくんないよ」と言う、「……同門の弟子以外には話せない」と応え、「父親」（ストレプシアデス）は、「……それなら安心して、わしに聞かせなさい。このわしは、この思案所へ弟子入りにやって来たのだから」と答える。そこで、弟子は、「……今さっきカイレポンに、ソクラテスが問いを掛けられたのだ。蚤（のみ）は自分の足の何倍を飛ぶのかということな。というのも、カイレポンのもじやもじやした眉（まゆ）を噛（か）った蚤（のみ）が、ソクラテスのはげ頭に飛び移ったからだ」と言い、「……へえー、それをいったいどういうふうに計ったのですかい」と訊くと、「……至極巧妙なやり方なのだ。まず臘（ろう）を溶かす。それから蚤（のみ）をつかまえて来て、その両足を臘（ろう）の中へひたすのだ。またそれからこれを冷やすのだ。そうすれば、蚤（のみ）の足のまわりにペルシア風の靴が発生するという寸法だ。それを脱がせて、所定の距離を計っていたところなのだ」と言う。

また、ある時は、「……カイレポンが、ぶよは、口で鳴くのか、それとも、尻で鳴くのか？」と、ソクラテスに質問したところ、ソクラテスは、「……ぶよの腹の中は狭い。だから、この細いところを通るのに、息は無理押しして、しゃにむに尻へと直行することになる。ところが、この狭い通り路にとりつけられている肛門は、空洞になっているから、その空気の圧力で音響を発することになる」という話やら、また、つい最近では、せつかくの一大思想を、青とかげのために、取り逃してしまったという。それは、「……月の軌道と回転のさまを調べておられたのだ。ところが、上を向いて口を開けておられたので、屋根の上から、夜陰に乗じて、青とかげが小便をしかけたという話」などをする。

もちろん、これらは実に馬鹿馬鹿しい話であり、観ている観客たちもあきれて大笑いしただろうと思うが、しかし、その「笑い」は、ただ単に「劇上のソクラテス」だけではなく、実際の「ソクラテス」にも向けられていたことにもなるのだろう。というのも、ある有名な人物を主人公にして喜劇を書く時には、できるだけその人物の特徴をとらえて、それをかなり誇張した形で、面白おかしく書き上げるものだが、しかし、それは、まったくの嘘ではなく、見ている観客にも、「そうだ、そうだ、そういうところが確かにあるぞ！」と思わせなければ、喜劇としては成功したことにはならないからである。つまり、ソクラテスという人物は、「……天上地下のことを探究し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている」ような人物として、一般に、アテナイの市民たちにもそう思われていたのだろう。そうでなければ、この喜劇が受け入れられるはずもないからである。もちろん、この「喜劇」そのものの面白さも当然あるだろうが……。

一、思案所内部の全景

さて、次は、前景の被い^おが取り除かれて、思案所内部の全景が示されるが、そこには、例えば、地下のことを探究している人たちや地の底（タルタロス）深く闇の世界を探っている人たち、また、天文学や幾何学（測地学）などを行なっている人たちがいる。そして、最後に、高みに浮かんでいる（つまり「釣りかご」の中の）ソクラテスが、いよいよ登場することになるが、それに対して、「父親」（ストレプシアデス）が、「……まず第一に、お前さまは何をしてござらっしゃるのか、お願いだわしに教えてくだされ」と訊くと、ソクラテスは、「……これなん、空気をふみ、思いを太陽のまわりに馳せているところだ」と答える。そして、「……さよう、天空のことというものは、思想を宙に釣るし、思索を思索そのものと同類の、空気によく混ぜるのでなければ、科学的に正しい仕方で見えることは出来なからうというわけなのだ」と言う。そして、「……お前がやって来たのは、何のためだ」と訊くと、「……弁論の仕方を習いたいと思つてですわい。何しろ利払いだの、借金取りだのと、因業に取り立てられ、荒らし廻^{まわ}られていて、家財も差押えを食つている始末だからね。……わしに一つ伝授しておくんなされ。お前さまの持つてござる二つの論のうち、借金をまるまる返さないですむ方の奴をさ。お札のところは何とでも請求通りに支払いますからね。神様に誓いを立ててもいい」と答える。

それに対して、ソクラテスは、「……神さまに誓うんだって？　どんな神様のことかね。最初断っておくが、われわれのところでは、神さまなんてものは通用しないのだ」「……

へえー？　じゃあ、誓いの時に通用するのは何ですかい」と訊くと、「……お前は確実なところを知りたいと思うかね。神事というものは、科学上正しくは、どういふものであるかということを」「……ぜひとも、なろうことなら」「……そしてわれわれのあがめまつる雲ひめさまと、言論の交わりをすることをも」と訊くと、「……はい、はい、どうぞそういうことをお願いします」ということで、ソクラテスは、入門入信の儀式を行なうことになるが、その部分は省略して、ソクラテスは、「……そこな老人よ、しずかに口をつつしみ、わが祈りを心してうけたまわれ。」「……ああ主なる、わが君、大地を宙にささえたもう、無量のアエール（空気）よ、ひかりかがやくアイテール（上空の澄んだ大気）よ、稲光と雷鳴（らいめい）をもたらす、おそろしの女神、雲ひめたちよ、いざ立たせたまえ、これなる思索所の空高く、おん姿（すがた）をあらわしたまえ」と言つて、「雲の精」（コロス）を呼び出し、やがて、「雲の精」（コロス）の声が聞こえてくる。それに対して、「父親」（ストレプシ阿德ス）は、「……ソクラテス、教えてくだされ、これはどなたですかい。このおごそかな声を聞かせたのは。あの世からの精霊ですかい」と訊く。ソクラテスは、「……いや、ちがう。これは天の方から下られた雲の精だ。働かないでぶらぶらしている連中から、大へんな信仰を受けている女神たちだ。気のきいた意見、たくみな討論、知性のひらめき、奇抜な言葉、遠廻しの言い方、たたきつけるような弁舌（べんぜつ）、要領の良い把握などをさずけて下さるもの」であると答える。

つまり、当時、非常に人氣のあつたソフィストたちは、家庭教師のような形で、青年たちに「弁論術」（いわば「巧みな話術」）などを教えていたが、それは、いわば「口先ひとつ」で、生計を立てているような人たちであり、今日で言えば、まともに働かなくても、例えば、インターネットで「儲け（ひしもち）みたい」な、そういう人たちの「神」（いわば「信仰の対象」）こそは、まさに「雲」（つまり「雲姫たち」……雲・霧・靄（もや）・露（る）など）であり、当時の青年たちは、ソフィストたちのそのような「生活」（生き方）に憧れていたことにもなるのだろう。それでは、なぜ「雲」なのかと言えば、それは、当時の自然哲学者たち、例えば、タレスは、万物の根源は、「水」とし、また、アナクシメネスは、「空気」だとし、そして、ヘラクレイトスは、「火」とした。また、ピュタゴラスは、「数」とし、また、エンペドクリスは、「四元素」と「愛と憎しみの二力」とした。そして、デモクリトスは、「原子（アトム）」だとした。そのように当時の自然哲学者たちは、まさに「無神論的自然観」に立っていた。つまり、「自然」（つまり「四元素」）こそは、まさに「万物の根源」であり、それゆえ、この世を生み出した「神」は、いわゆる「オリンポスの十二神」ではなく、むしろ「自然」（つまり「四元素」）であるという「考え方」に立っているのである。それゆえ、そのような「考え方」（つまり「無神論的自然観」）に立っている人たちの「信仰の対象」は、いわゆる「オリンポスの十二神」ではなく、むしろ「自然」（その中の「雲」という「設定」（つまり作家の「作り話」）になっているのである。

そして、作中のソクラテスの考え方は、「……雲が、多量の水にみたされて、必然に運動するようになると、雨をいっぱいに含んで、垂れ下がることは必然で、それからその重くなった雲が、相互にぶつかり合つて、破裂し、ひどい音を出す（雷鳴（らいめい））を出すわけだ」と言う。「……でも、必然にそういう運動を雲にさせるのは、だれなんですかい。やつぱりゼウスじゃあないんですかい」と訊く。それに対して、「……とんでもない。それはむしろ青雲（アイテール）のデイーノス（渦巻）なのだ」と答える。「……デイーノス？

それは気がつかなかった。ゼウスなんてものはいないので、その代わりに今は、ディーノスが支配しているとわね」と感心する。そこで、ソクラテスは、「……それでは、もうわれわれの認めるもの以外は、いかなる神も認めることはないだろうな。われわれの認めるのは、かの『混沌』と、この『雲』と、それから『弁舌』の、この三体なのだ」と言う。「父親」(ストレプシアデス)は、「……それ以外のものは、たとえ面と行き会うことがあっても、言葉を交えることさえ絶対にしはしませんや」と答える。そうすると、コロスの「長」(雲の精)は、「……さあ、それなら、私たちに何をしてもらいたいのか、言うてごらん。遠慮はいらない。私たちを尊び、敬って、わたしたちの意になう人間になろうと努めている限り、お前の望みはかなえられるだろうからね」と言う。そこで、「父親」(ストレプシアデス)は、「……自分の望みはわずかなもので、一級の弁論家になって、自分の借金を踏み倒したいだけなのだ」と言う。それに対して、コロスの「長」(雲の精)は、「……それなら、そのお前の希うものを取らせよう。大した望みではないのだから、いずれにしても、わたしたちに仕えるこれらの者に、思い切って身をまかせることだ」ということで、いわゆる「ソクラテスの学校」(思案所)に入って勉強することになるというのが、いわば「前半部分」になるということである。

二、中段(中休み)

さて、ここで「中断」(中休み)が入り、そして、作者自身の「考え」、つまり、なぜ、このような「喜劇」(つまり『雲』)を書いたのか? その作者自身の「思いや考え」などを素直に語るといふ場面になる。それを要約すると、それは、次のような内容である。つまり、「……さてご見物のみなさま、あなた方には、ざつくばらん本当のことを、これなる育ての親ディオニュソスさまに誓って、すっかり打ち明けて申し上げましょう。わたくしは賞が得たいのでございます。優秀な作家だと認められたいのでございます。それはあなた方こそ理想の見物客、この作こそわたしの喜劇作品中の傑作と考えたからで、まず誰よりも先にあなた方に、わたしのこの一大苦心の作を味わっていただきたいと思った次第でございます。(中略)、また生れつき行儀のよいところは、とくにごらんいただきました。この作はまず第一に、皮でつくった妙なものを縫い付けて、ぶら下げるようなことはいたしておりません。例の真赤な太物で、子供衆を笑わせようなどとはいたしておりません。また、禿頭をからかったり、主役の老人に杖でその場に居合わす誰彼をなぐらせて、へたな洒落をごまかしたりするようなこともいたしません。頼むところは作品そのものの、詩歌の力だけで、ここへ出て参りました。そして、同じものの焼き直しを二度も三度も持ち出して、あなた方をあざむく算段もいたしません。いつも新しい様式を入れるのに知恵をしぼり、どれも似たものばかりというようなことがなく、みんなそれぞれに面白いものばかりでございます」と、いわば自分の「喜劇作家」としての「信念」を語っている。

三、正論と邪論

さて、「話」(ストーリー)は、ここから「後半部分」に入っていくことになるが、それは、次のような内容からである。まず、ソクラテスが思案所から出てきて、「……こん

な男って、一人も見たことない。粗野で、ゆうずうがきかず、ぶきつちよで、忘れっぽいときている。幼稚園程度のことを覚えるのにも、覚えるより先に忘れてしまう男なんて。しかしまあ仕方がない」ということで、「父親」(ストレプシアデス)を外に呼び出すことにする。そして、再び、二人のとんちんかんな「問答」が展開(何度も繰り返される)ことになるが、例えば、「にわとり」のオスとメスとをどう呼ぶかという「問答」では、オスは、にわおすどり、メスは、にわめすどりと呼ぶとか、また、訴訟を消してしまう方法としては、水晶玉を(虫メガネのように)使って、わしの訴訟ごとが記されているところを、溶かして(焼いて)消してしまうとか、また、訴訟をはぐらす方法としては、まだ先番の訴訟事件が行なわれていて、わしの番の呼び出しが来ないうちに、走って、首をくくるのは、どうですか。だって、わしが死んでしまったら、誰も訴えようがあるまいとか、それに対して、ソクラテスもあきれてしまい、「……愚劣だ、もうお前には教えてやらん、とつとと出てうせろ」と言うのと、「……そりやあまたなぜですかい、どうしてですかい」と訊くので、「……お前は何を教えてもらっても、すぐ忘れてしまうのだ。うそだと思うなら、いま最初に何を教わったのか、言ってみろ」と言われて、「……ええと、はてな、最初は、と、何だっけ、出てこない……」ということで、お前ではだめだから、息子を嫌でもなんでも連れてこいという展開になっていくのである。

そこで、「父親」(ストレプシアデス)は、「息子」(ペイディピデス)を何とか説得をして連れて来ては、ソクラテスと呼び出し、そして、この子は、もともととは利口な子で、二つの「論」を教えてやっておくんなさいと心からお願いをする。そして、この場面で、あまりにも有名な『正論と邪論』との両者の「議論」が展開(繰り広げられる)ことになるが、その内容の「要約」は、次のようなものである。

まず、最初のうちは、『正論と邪論』とがお互いに相手の悪口を言い合うばかりで、それでは埒があかないということで、コロスの長は、「……これ、腕力沙汰はやめにしなさい。悪口を言うだけでは仕方がない。それより、お前さん(正論)は、昔の人の教育がどんなものだったかという、その模範(もはん)を見せるがよい。——一方、お前さん(邪論)は、新教育の模範(もはん)を見せるんだね。そうすれば、この男(息子)もお前さん方の反対弁論を聞いた上で、自分で判断して、どっちを勉強するかが決められるというものさ」ということになり、そこで、まず、『正論』の方から「話」を始めることになるわけである。

四、正論(強い論)

さて、その『正論』の内容であるが、それは、「……しからば、いにしえの驕け(しやうけ)のほどが、いかなるものであったか、お話し申そう。それはこのわしが、正論をはいて、いや栄えに栄え、節度というものが重んじられた頃のことだ。まず第一に、子供は口の中でもぐもぐ言うような話し方を、人前ですることは決して許されなかったのだ。また次には、音楽を習いに行くのに、同地区の者は集団で、雪が粉のように降って来た時でも、外套は着ないで、秩序正しく往来を歩いて行かなければならなかった。それからまた、両膝をくっつけて、前をかくすようなことはしないで、堂々と「雄たけび遠くひびき」とかいふ歌を、父祖(ふそ)の代から伝えられた音律に合わせて歌うことを、早くから覚えるように仕込まれたのだ。そしてかれらの誰かが、ふざけた真似をしたり、あるいは昨今(さつこん)の新しがり屋の音楽家

がやっているような、とても満足に曲げることの出来ない、妙な曲げ方をしたりすれば、歌神かしんを無にする者だというので、散々に打擲ちようちやく、折檻せつかんされたものだ。また、体育の先生のところへ行つて座っている時には、子供は膝ひざをちゃんと前へ出して、外部の人に不作法の跡形あとがたを見られないようにし、また、逆に立ち上がる時は、砂をならして自分たちの若さの跡形あとがたを、好色の連中の眼にさらさないように気をつけなければならなかった。そして当時は、誰も子供は臍へそからしたには油をぬらなかつたので、かくしどころには露と薄毛が、まるで花梨かりんを見るように、花咲いていたのだ。また声をやわらかにくねらせ、眼にものを言わせて、われから色好みの連中に近づくようなこともしなかつた。また食卓では、二十日大根はつかだいこんの根のところは、子供が取つてはいけないものとされ、また甘いものばかり取つて食べたり、くすくす笑いをしたり、足を組んでいたりすることも、許されなかつたのだ。これが、かのマラトンの勇士をやしなつた、わしの教育のよりどころである」と言う。

また、「……このわしを選ぶようにしなければならんのだ。わしが強い方の論だ。そうすれば、盛場アゴラをきらい、温浴おんよくを避け、恥を恥とし、誰かお前を嘲あざける者があれば、憤慨するということを解するようになるだろう。また年長者が近づいて来た時には、座席から起立をし、両親に対しては無礼のふるまいをすることなく、ほかに何ひとつ恥ずべきことを行なわないようになるだろう。つまり慎みというものの理想像を、お前があらためて建立こんりゆうしようとしていることになるからだ。また踊り子の家へ急ぎ足で出かけて行って、見るものにうつつをぬかし、売女ばいじょに林檎りんごを投げてもらつて、あたらし名を傷つけられるようなこともないだろう。また父親に口答えをするようなことも決してないし、また、(両親を)廢人イナベトス呼ばわりして、自分が大切に育てられて、そこから巢立ちした年月を、かえつて逆うらみするようなこともないだろう」と力説をすることになる。

それらに加えて、「……花やぐ毎日を体育場で、元氣な顔をして過ごすことになるだろう。そうすれば、お前の胸は、いつも元氣いっぱい、色つやは輝くばかり、肩幅もひろく、舌短くて、尻は大きい。——一方、今時のやり方を習いとするならば、まず第一に、お前の顔色は、蒼白あおしろくなり、肩幅は狭せまく、胸は薄い。舌ばかり長くて、尻は軽い。また、醜みにくいことを、すべて美しいと思ひ、美をかえつて醜とするように仕込まれ、尻癬しりぐせのわるい真似まねをするようになるだろう。そして、盛場さかりば(アゴラ)をうろついて、ひと泣かせの途方もないことを、口にかかせてしゃべりまくり、また、つまらない事件に引きこまれて、しつこい反対弁論のやりとりにより、心身を擦りつぶすようなことにもなるのである」と語る。

五、邪論(弱い論)

一方、『邪論』の内容としては、「……まず、何よりも弱い立場の議論を取りながら、それでいて勝つという、このことこそ一万の金貨よりも値打ちがあるというものだ。また、温浴おんよくを先ず第一に許さないだろうと言っている。それは、男を懦弱だじやくにする、大へん悪いものだと言うが、しかし、ヘラクレスにゆかりの温泉というものはあるけれども、いったいどこにヘラクレスゆかりの冷泉なんてものがあるのか」と反論する。それに対して、「正論」は、「……ああ、これだ。これがあれなのだ。若いものに一日中いつもおしゃべりばかりさせて、風呂場を満員にし、角力場すもうを空にするものなのだ。『……それからまた、盛場アゴラで暮らすのを、お前は悪く言っているが、おれはいいことだと言いたいし、また、若い者

が弁舌を練るのは、よくないとぬかしくさっているが、わしは大いに練るべきという論だ。またさらに、慎みを忘れるなど説いているが、慎みを忘れないなんてことのうちに、何があるのか、すっかり見てみたまえ。どれだけたくさんの楽しみを取り上げられようとしているのか、わかるだろう。稚児さんも女も、乱痴気さわぎも、うまい食べ物も飲み物も、また高笑いすることも、いけないことになるのだ。しかしこれらのものを取り上げられてしまったら、生きていることが君に、何の値打ちがあることになるだろう」と反論する。さらに、最後は「色好み」の問題になるが、例えば、「……いま君が過ちを犯すとするね。恋をして、ひとの女を取ったりするわけだ。そうすれば、次はつかまって、身を滅ぼすことになる。申し開きができないからね。ところが、このおれについていけば、自然のままに振る舞って、はねるも笑うも勝手次第、どんなことでも恥ずかしいなどと思うことはないのだ。間男でつかまるようなことがあっても、相手にこう言って反論するだろう。何も悪いことをしたのではないと言ってね。そして、それからゼウスを引き合いに出すのさ。あんな神さまでさえ、恋と女には弱いのだ。それを君は、死すべき人間の身で、どうして神さまにも出来なかったようなことを、することが出来るだろうか」と。また、公職弁護人になっている連中は、どういう人間だね。みんなおかま好きだろう。それは、悲劇の作家も、大衆の指導者も、また、ここにいる見物客だって、おかま好きの方が多いだろう。「……すると、お前の言い分は、いったい何だね」と反論されることによって、「正論」は、「……もう負けた。多数決だから」ということで、いわゆる「正論」と「邪論」との議論は、ここで終りを告げることになるのである。

*

*

さて、今までの話を聞いていた父親と息子に対して、ソクラテスは、「……さあ、いったいどうするんだね。ここにいる息子を、つれて帰る方を希望かね。それとも、わしに弁論の教育をしてくれというのかね」という言葉に対して、「……教えてやっておくんなさい。びしびしとやっておくんなさい。そしてどうか忘れずに、これを上手に鍛えて、一方ではこまごました事件にも合うようにしておいて、もう一方の顎は、もっと重大な事件に向くように鍛えておくんなさい」ということで、いわゆる「思索所」(思索所)へとソクラテスは息子を連れていく。一方、父親は、自分の家へと帰る。――さて、その「思索所」(思索所)で訓練を受けた「息子」(ペイディピデス)は、借金の取り立てにやってきた人たちを、身に付けた達者な「弁論術」で相手を言い負かして、いわゆる「借金取り」を追い払うことには成功するが、しかし、一方、「父親を殴る」ようになってしまった。その理由としては、例えば、子供が悪いことをすれば、「……親は、子供のためにと思って叱ったり、また、殴ったりするもの」であるが、それと全く「同じ論理」によって、「……子供は、父親のためには思って叱ったり、また、殴ったりすることは、正当な行為であり、それゆえ、悪いことではない」と主張する。しかも、母親を殴ることも、同じ理由で正当なことだと主張する。それに対して、「父親」(ストレプシアデス)は、こんなことを教えた「思索所」(思索所)は絶対に許せないということから、その「思索所」(思索所)に火を付けて、燃やしてしまうというところで、「話」(ストーリー)は、終わることになるのである。

六、結び

さて、「作者」(アリストパネス)は、なぜ、このような『雲』という作品を書こうとしたのか？ それは、かつては「繁栄と栄華」を極めていたアテナイが、どうして今のように「腐敗・墮落」してしまったのか？ 特に「若者」(青年たち)の「心」を「腐敗・墮落」させたものは、一体、何かと問うた時に、それは、まさに「新教育」のせいであり、その中心にあったものが、まさに「ソフィスト」たちであり、その「ソフィスト」たちが家庭教師として当時の「若者たち」(青年たち)に、いわゆる「弁論術」(いわば「巧みな話術」)などを教えていたために、それを身につけた「若者たち」(青年たち)は、その「弁論術」(いわば「口先一つの理窟」)を巧みに捏ねて(つまり「悪用」)して、今まで「正義」(正しいこと)とされてきた「正論」さえも、ことごとく「愚論」にしてしまうという風潮とともに、もう一つは、特に「無神論的自然観」によって、いわゆる「神の存在」が否定されて、まさに「何も恐れるものがなくなってしまった」(つまり「畏敬の念」を喪失してしまったことこそは、当時の「若者たち」(青年たち)の「心」を「腐敗・墮落」されている、まさに「最大の要因」であると考えていたということである。もちろん、世に「ソフィスト」たちと呼ばれる人たちは、数多くいただろうが、その中でも、当時、すでに有名だったソクラテスこそは、(もちろん、実際は「ソフィスト」ではなかったが)、まさに「喜劇の主人公」(つまり「ソフィストの代表」)として最もふさわしいキャラクターを兼ね備えていたということである。そのために、ソクラテスがその「主人公」(つまり「登場人物」)になってしまったということである。

むろん、当時の古代ギリシアのアテナイでは、いわゆる「直接民主政治」が行なわれていた「都市国家」であったが、その「都市国家」においては、何よりも「自由と平等」とが尊重されている社会であり、それゆえ、この「民主制」というのは、それが健全に機能している間は、むしろ「好ましい社会」と言えるものだが、しかし、この「民主制」というものは、遅かれ早かれ、必ず、「腐敗・墮落」して、いわゆる「衆愚政治」(或いは「衆愚社会」)に深く陥り、実に多種多様な「社会病理」に深く悩まされることになる。なぜなら、まさに「自由」(つまり「何をやっても個人の自由」)という美名のもとに、法に触れなければ、或いは、人に見つからなければ、何をやっても構わないという、そういう、もうありとあらゆるうそやでたらめまた不正や悪徳などが堂々とまかり通り、そして、正しくまじめに生きる人間などは、「大ばか者」となり、他人よりも少しでも多くの欲望を貪欲にむさぼることが、最も「幸せなこと」として、他人に見つからなければ、どういう不正を働いても構わないという破廉恥、不道徳、放縦、無責任さが、あたり前のようになってしまう。それだけありとあらゆる不正や揉め事や犯罪などが、毎日のように生じてくるような、そういう全く手がつけれられない社会の混乱と腐敗と墮落とを招き、その国家のまさに「混乱と腐敗と墮落ぶり」は、もう目を覆うばかりになってしまう。

そして、そのような「民主主義」の最大の欠陥を、ソクラテスやプラトンなどは、はっきりと見抜いていた。――すなわち、この「民主主義」というものは、われわれ人間の「内面」を骨の随まで腐らせるとともに、われわれ人間の「精神的自立」(或いは「道徳的自立」)をどこまでも妨げるものであると。

*

*

雲崇め
樂して生きぬ
心魂根か

「参考文献」

- ※底本「オイディプス王」ソポクレス・藤沢令夫訳（「岩波文庫」）
- ※底本「ギリシア喜劇Ⅰ アリストパネス（上）雲」（「筑摩書房」）
- ※底本「世界の名著アリストテレス」（「中央公論社」）